

●折口信夫（1887-1953）と井筒俊彦（1914-1993）

日本の「近代」とは何だったのか

「近代」とは「前近代」との複合としてしか成り立たない

日本の「前近代」とは呪術的な未開社会を意味する

日本とは列島であり、アジアの「雑種」としてしか存在しえない

折口も井筒も近代人であり、「神の死」以降を生き抜いた表現者にして思想家である

折口はハイデガーと同時代人であり、井筒はデリダと密接な関係をもっていた

「神」は存在しないが、他者としての「言葉」が存在する

「言葉」と「身体」と「神」は分離することができない

●『言語情調論』と『言語と呪術』

言語の直接性と間接性、感性的機能と知性的機能、コノテーションとデノテーション、
言語の自己表出性と指示表出性

折口信夫の大学卒業論文『言語情調論』（1910年）

藤無染の新仏教→アメリカの一元論哲学（monism）→ポール・ケーラスと鈴木大拙

本荘幽蘭の神風会→神憑りの教派神道→金光、天理、大本→鎮魂帰神法

金沢庄三郎の比較言語学＝比較神話学→「語根」と活用語尾

柳田國男の民俗学

井筒俊彦の最初の英文著作『言語と呪術』（1956年）

西脇順三郎と折口信夫、アブデュルレシト・イブラヒームとムーサー・ビギエフ

『神秘哲学』（1949年）→ディオニュソスの憑依による哲学の発生

『マホメット』（1952年）→預言者の憑依による宗教の発生

『ロシア的人間』（1953年）→「神を胚胎する民族」による文学の発生

『コーラン』の翻訳（1957年）へ

●「天皇」と芸能民

→非血縁者による「家」の存続→15世市村羽左右衛門

●歌と物語と舞台

●『万葉集』と『旧約聖書』

折口信夫の『万葉集』

井筒俊彦の『旧約聖書』

●井筒俊彦『言語と呪術』の構成

第1章 序論

呪術 (magic) と論理 (logic) の狭間で

第2章 神話的な観点から見られた言語

『旧約聖書』と『万葉集』

第3章 聖なる息吹

アニミズムの復権

第4章 現代文明の直中に甦った言語呪術

文学、法学、論理学の再定義

第5章 <意味>を成り立たせる基盤としての呪術

民族学と発達心理学、「野生の思考」の再検討、デノテーションとコノテーション

第6章 コノテーションで示されるものの実体化

言語は「無」を表現することができる

第7章 語のもつ喚起的な力

感情による詩的言語の発生

第8章 構造的な喚起

「文法」によって文化は規定されている

第9章 自発的に行われる儀礼と言語の起源

聖と俗の分割、聖と俗をつなぐ「自発的に行われる儀礼」

第10章 呪術の環のなかの言語

呪術的な外的粹取りと内的粹取り、ふたたび『旧約聖書』と『万葉集』

第11章 力を強められた言語

言語は現実を変革する、ムハンマドと『コーラン』

●リアルとフィクション、構造と現実の相互転換

●「物語」の彼方は可能か

●「復興文化」の現在